

自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録

1



白根開善学校中等部・高等部

白根開善学校 美術同好会



ツルの形の群馬県

学校法人 白根開善学校
白根開善学校高等部
白根開善学校中等部
〒 377-1701
群馬県吾妻郡中之条町大字入山 1-1
TEL 0279-95-5311
FAX 0279-95-5315
URL <http://www.shirane.ac.jp/>
E-mail info@shirane.ac.jp

白根開善学校は群馬県の山奥にある私立の中学・高等学校（全寮制）で、生徒・教職員あわせて100名ぐらいの小さな山の学校です。「美術同好会」はそのクラブ・サークル活動の一つで、“美術”を名乗っていますが、普段の活動の中心はもっぱら陶芸で、顧問は結構いい加減ですが、生徒たちはまじめに土をこね、ロクロを回しています。

「やきもの」は少し前まで薪を使い登り窯等の薪窯で焼かれていましたが、現在は電気窯、ガス窯が中心です。「穴窯」は平安時代から伝わる薪窯で、小さなほら穴のような形をしており、奥に作品を詰め、手前で火を燃やし、約1週間焚き続けます。燃えた薪の灰が作品に降りかかり、灰が溶けて釉薬（薄いガラス状で光沢や色彩がある皮膜）「自然釉」になります。

この記録は主に「自然釉」について、窯場での作業や作品についてなど、これまでの活動を中心にまとめたものです。

白根開善学校 美術同好会
顧問 関口 正人



穴窯焼成の記録
自然釉のやきもの

自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録



「ピリケン」浦上くんの作品



「横シマな生物（練込み）」茂筑くんの作品



「紫蘭絵付け皿」松波さんの作品



「練込み壺」英くんの作品



「印花大皿」英くんの作品



「練込み角瓶」英くんの作品



「土灰大壺」笹嶺んの作品



「緑釉茶碗」笹嶺くんの作品



「刷毛目茶碗」廣野さんの作品

1999 美術同好会メンバー



2002 美術同好会メンバー



電気窯焼成による「生徒作品集」

学校には陶芸用の電気窯があり、生徒の作品を焼いています。「暮らしのうつわ」をテーマにした使いやすい食器づくりを目指していて、装飾的な技法では「絵付け」「練込み」「刷毛目」や「象嵌」など、見様見真似で挑戦中です。

メンバーの写真は陶芸室で撮影したもので、左の写真のヤカンの載っているストーブは薪ストーブです。学校は今でも冬期は薪ストーブを使用しており、灰は釉薬の原料にも使えます（焼き芋をすると最高にうまいヨ!）。



「ミッキー&ミニー・マグ」高澤さんの作品



「カッパのティーセット（練込み）」久保さんの作品



自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録



蹴ロクロに挑戦中

榛名山の麓に益子出身の陶芸家、五十嵐俊樹さんがいます。陶房に見学に行った時、蹴ロクロを体験させていただきました。右足でロクロを蹴るように回しながら、土を挽くのですが、右手、左手と右足とすべて違う動きをするので悪戦苦闘中です。

やきものができるまで

① 土練り

荒練り 土をよく混ぜ、かたさを均一にします。

菊練り 土の中の空気のツブを抜く、空気が入っていると焼いた時に膨張して割れてしまいます。

② 成形

右の写真はロクロ（電動）による成形です。土を手で挟んで、指で絞るように挽きあげてゆきます。非常に感覚的でうまく挽くには慣れが必要です。他にも手びねり、ひもづくり、タタラづくりなど、様々な技法があり、それぞれ奥が深く味わいがあります。

③ 素焼き

成形後、乾かした作品を700度～800度まで温度を上げて焼きます（約10時間）。土が石のように焼きしまり、釉薬がのりやすくなります。

④ 施釉

釉薬を作品のまわりにつけ、この釉薬が溶けてガラス状の薄い皮膜になります。組成は主に長石や珪石、石灰石などで、銅や鉄など酸化金属を調合することで色彩や光沢もかわってきます。（自然釉の作品には施釉はしていません）

⑤ 本焼き

1230度～1270度ぐらいまで温度を上げて焼成し、やきものができあがります。



① 土練り（荒練り）



菊練り（土を少しずつずらしながら練り、菊の花びらのようなひだができます）



② 成形（ロクロ） 土をターンテーブルの中心に入れ、回しながら挽きあげます



③ ロクロから切り離し、触ってもゆがまない程度まで乾かします（生乾き）

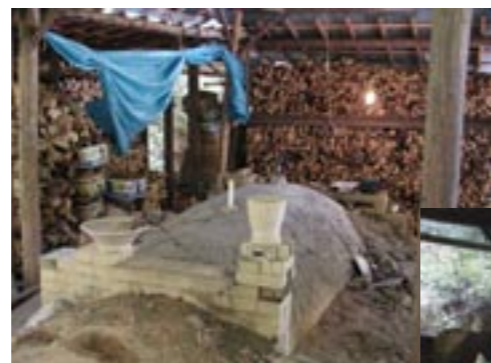


④ カンナを使い、裏側を削り高台をつくり、湯呑みが完成です

自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録



窯場（大戸窯）



穴窯（後方より）、積み上げた煉瓦より手前が捨て間、奥が燃焼室

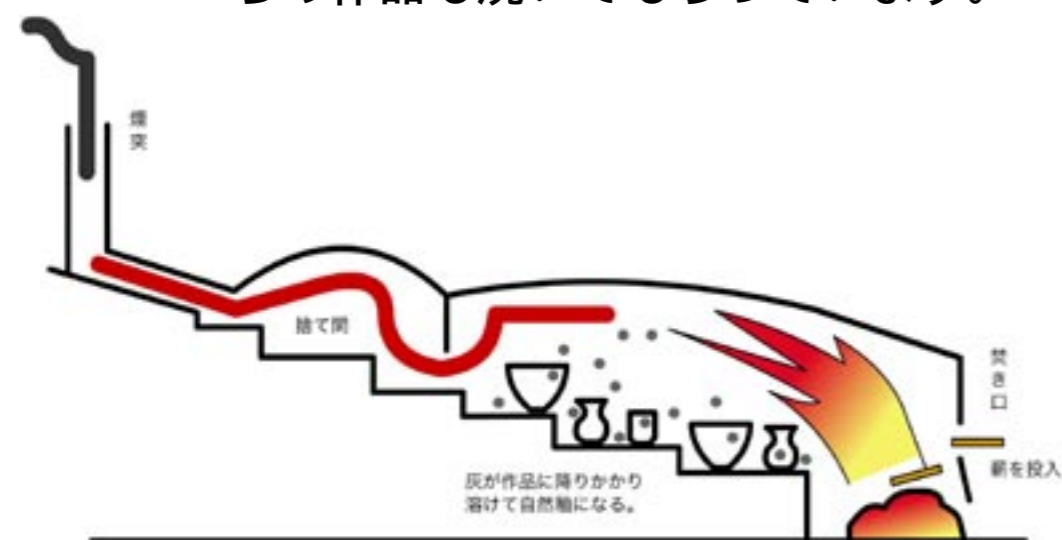


穴窯

穴窯とは、平安時代より伝わる窯で、薪を投入する燃焼室に作品を置く一部屋の構造です。

油分の多い赤松の薪を燃料に約1週間焚き続けると、灰が作品に降りかかり、溶けて自然釉になります。穴窯の作品の特徴は釉薬をかけない、いわゆる焼き締めで、灰被りによる自然釉、焦げ、火色など変化のある作品が生まれます。

学校には穴窯はありませんので、近くの窯元にご協力いただき、薪割りや窯焚きを手伝いながら、自分たちの作品も焼いてもらっています。



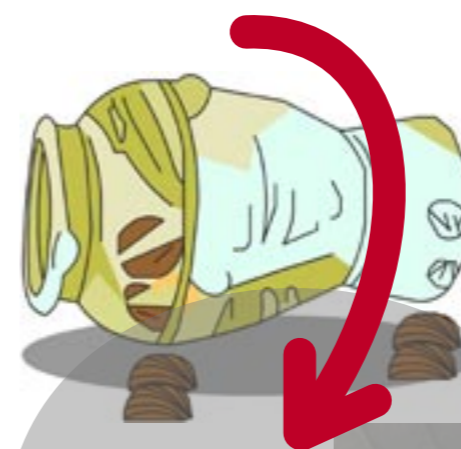
自然釉について

穴窯の中で薪である赤松の灰が作品に降りかかり、陶土の成分（長石など）と溶け合うことでガラス質に変化したものです。

自然釉は、美しく自然なビードロが流れる伊賀焼、赤褐色の焼け焦げた発色を楽しむ信楽焼などが有名です。



「自然釉壺」 村田康男



この壺は、4個の赤貝の貝殻を台にして、横向きに置かれていました。水色の部分は灰に埋まっていたので、強い還元がかかり、このような景色が生まれたようです。

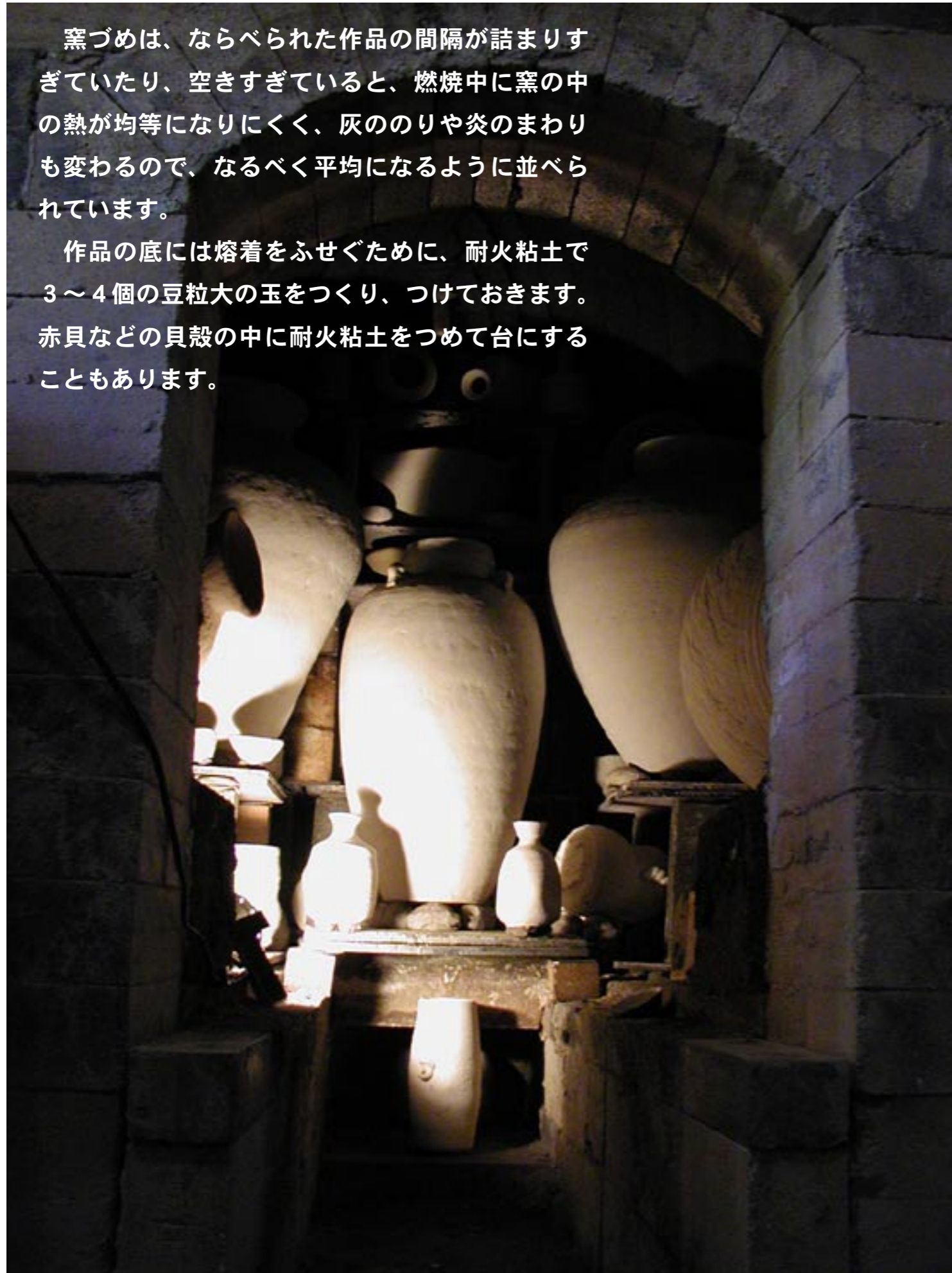


窯づめされた作品、天井から飛び出しているのは温度計の先端部

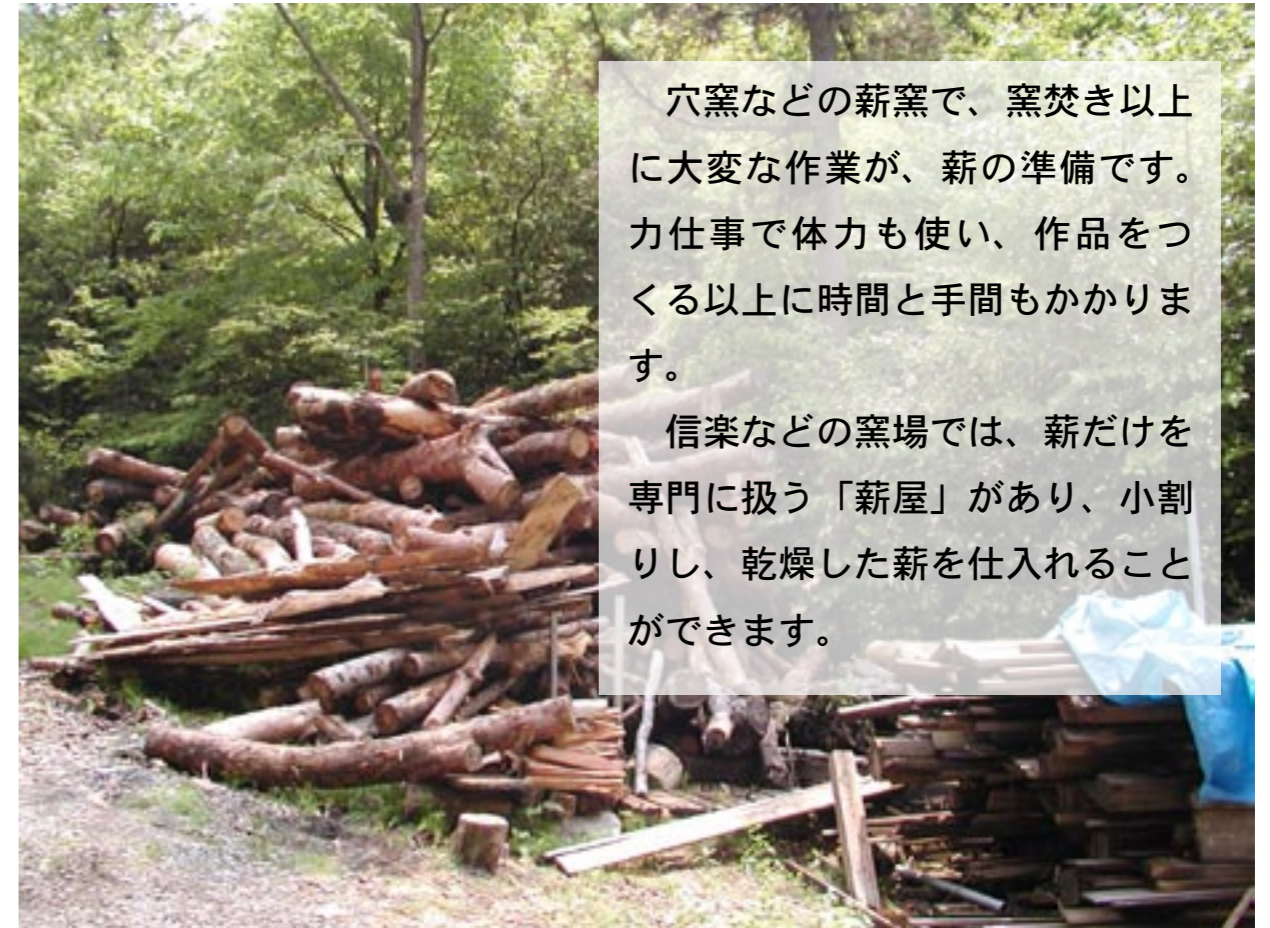
自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録

窯づめは、ならべられた作品の間隔が詰まりすぎたり、空きすぎていると、燃焼中に窯の中の熱が均等になりにくく、灰ののりや炎のまわりも変わるので、なるべく平均になるように並べられています。

作品の底には熔着をふせぐために、耐火粘土で3～4個の豆粒大の玉をつくり、つけておきます。赤貝などの貝殻の中に耐火粘土をつめて台にすることもあります。



窯づめが終わり、火入れを待つ作品



穴窯などの薪窯で、窯焚き以上に大変な作業が、薪の準備です。力仕事で体力も使い、作品をつくる以上に時間と手間もかかります。

信楽などの窯場では、薪だけを専門に扱う「薪屋」があり、小割りし、乾燥した薪を仕入れることができます。

赤松の原木をチェーンソーで約45センチに玉切りし、小割りします。

薪割りをしているところ。楽しそうに見えるが、実際には薪はかなり重く、腰が痛いです



薪割り機、ガソリンエンジン、左に刃が固定されており、薪を横に積み、押し込んで割ります



嬭恋村のキャベツ畑にてこの時は、台風で倒れた赤松がたくさんあり、チェーンソーを積み込み、ダンプで何度も運びました



薪を積み上げているところ、半年～1年乾燥させます

自然油のやきもの 穴窯焼成の記録



点火、窯焚きの始まり



窯焚きのスタッフは10名位、交代で窯の番をしながら、燃やし続けます



窯焚き 焙り（初期・1日目）

最初は割り箸の用に細い薪からチョロチョロと燃やし始め、1時間に50度位のペースで温度を上げてゆきます。

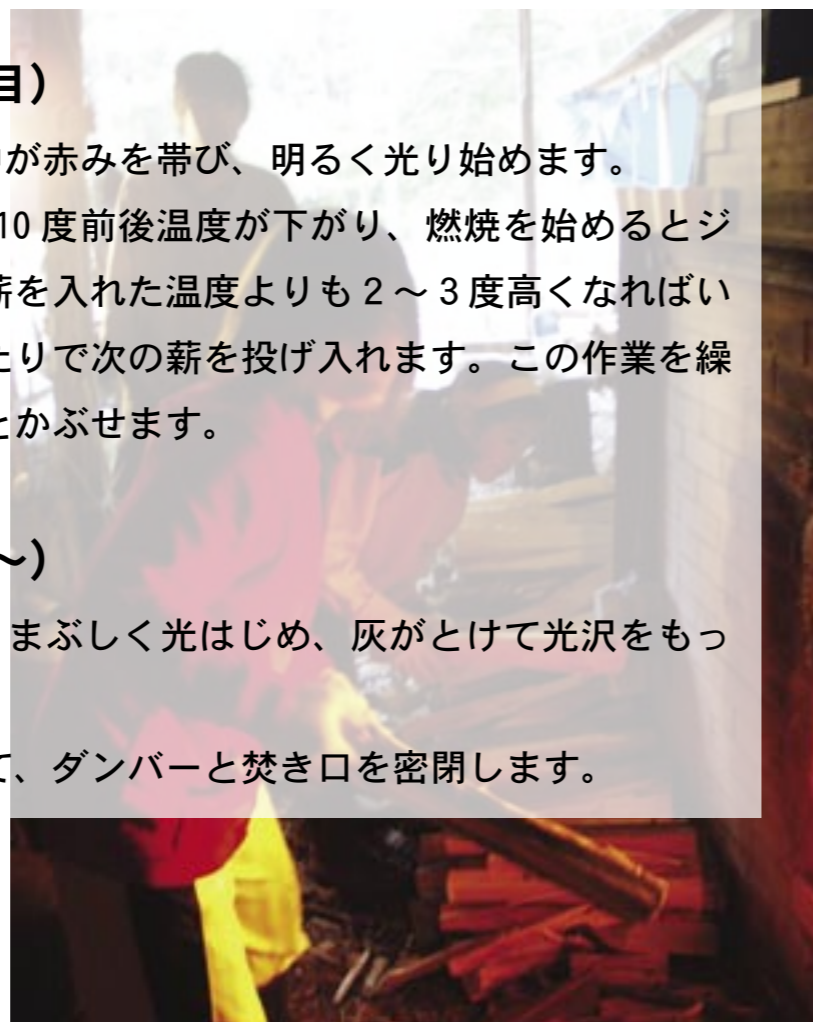
攻め（中期・2～4日目）

800度前後になると、窯の中が赤みを帯び、明るく光り始めます。薪を投げ込むと、熱を奪われ10度前後温度が下がり、燃焼を始めるとジワジワと温度が上昇し始め、薪を入れた温度よりも2～3度高くなればいい方で、温度が上りきったあたりで次の薪を投げ入れます。この作業を繰り返し、灰を作品にしっかりとかぶせます。

練らし（終期・5日目～）

1200～1270度になると白くまぶしく光はじめ、灰がとけて光沢をもってきます。

最後に釉薬の熟成を確かめて、ダンバーと焚き口を密閉します。



薪を投げ入れると煙突や両横の小さな丸い穴から炎が吹き出し、ボウボウあえぐように燃える（練らし）

自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録

焼き口を開け、焼き上がった作品が並んでいます



窯出し

窯焚きから2週間後、いよいよ窯出しですが、窯の中はまだ余熱が残っていてかなり暑いです。

作品との対面は、やはりいつでも緊張する瞬間です。作品は季節によって、天候や湿度、薪の状態などによっても焼き上がりが微妙に変わってくるようです。

作品は窯づめされた順番に運びだされ、並べられています。



すべての作品の焼き上がりが良いとは限らず、灰ののりが悪い、焼きがamai時はもう一度焼成することもあります



作品が運び出され、思わず笑顔が並ぶ

自然釉のやきもの 穴窯焼成の記録

自然釉の作品

出来上がった作品は、想像以上に素晴らしいものばかりです。

「次は大作に挑戦したい。」

「チョー楽しかった。」

絶対もう一度やりたい。」

「火の色に感動した。」

「自然釉は芸術だ！」

「充実してました。」

「薪割りはきついけど、

そのあとの夕食はサイコーに

うまかった。」

「アツイ!!」 etc...

普段以上に生き生きとした生徒たちの笑顔が印象に残りました。



横田くんの作品

三浦んの作品

廣野さんの作品



笹嶺くんの作品



久保さんの作品



英くんの作品



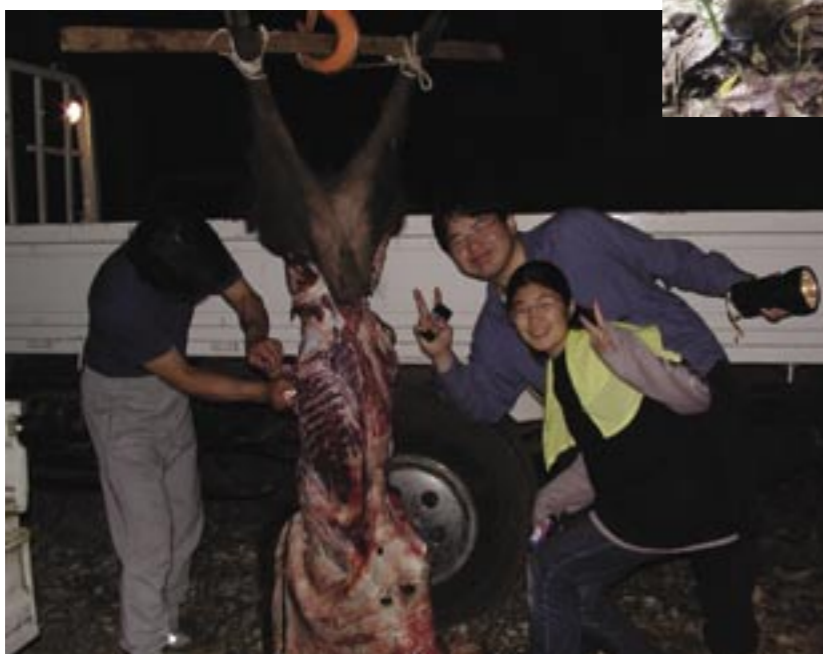
自然油のやきもの 穴窯焼成の記録

イノシシのこども「ウリ坊」
早く大きくなるんだよ



猟犬のセッター「花」

イノシシの皮を剥き、筋肉の付き方にそって
肉をはずしています



「ピース、うまそうだ!」と、どんな時でも元気な生徒たち



手前のトレーにあるのが、左前足のモモ肉。奥のトレーには背ロース、
肩ロース、バラ肉などの山もり

窯焚きの途中で

群馬県は山が奥深く、窯焚きの燃料となる赤松にも恵まれています。山の恵みと言えば、イメージとしてタラの芽やワラビ、ウドなどの山菜やイワナやヤマメなどの川魚が思い浮かびますが、昔から山の奥ではイノシシやウサギなどの野生動物も食べています。(現在はそうでもありませんが…)

協力していただいている窯元は猟師でもあり、窯焚きの最中に猟師仲間から、「イノシシがわなにかかったよ。」と連絡が入り、窯場にイノシシがやってきました。イノシシはあっという間に解体されてしまい、その晩は焼き肉パーティで盛り上がりました。生徒は「うまい!」「サイコー!」と食べていましたが、さすがにさっきまでの生々しい光景に自分は食欲がありませんでした。これも普段味わえない貴重な経験でした。



榛名の陶芸家、五十嵐さんのロバ「イイヨ」



イワナ



ふきのとう



たらの芽

自然釉のやきもの
穴窯焼成の記録

さいごに

毎年、秋に群馬県の高校芸術祭「美術工芸展」が開催され、陶芸作品を出品しています。賞を受賞するなど県内でも高い評価をいただいております。これまでに2度、群馬県の代表として全国大会にも陶芸作品を出品することができました。

毎日のように陶芸室にきて、放課後、夜間とロクロを挽く生徒たち。陶芸は奥が深く、難しいものですが、熱心に取り組み、しっかりと結果までを残してくれて顧問としてもうれしいかぎりです。

最後になりましたが、穴窯の窯元で陶房「里の茶屋」(本業はおそば屋さん)の屋主、渡邊幸男様・慶子様ご夫妻には、多くにわたりご指導、ご協力をいただき、改めて深く感謝申し上げます。



第26回県民芸術祭参加
高校芸術祭

書道部門展 第1展示室(1F)
美術・工芸部門展 第2展示室(1F)
写真部門展 第3-4-5-6展示室(2F)

会期 10月31日(水)～11月6日(水)
時間 午前10:00～午後5:00
10月31日(水) 10:00～12:00 14:00～17:00
11月6日(水) 10:00～12:00 14:00～17:00

主催 群馬県教育委員会 群馬県立美術館
協賛 群馬県立美術館



食との出会い 土とのふれあい
手打ちうどん・そば「里の茶屋」
陶房「里の茶屋」(大戸窯)
群馬県東吾妻郡吾妻町大戸 836-1
TEL・FAX 0279-69-2252
〒377-0931

第25回全国高等学校総合文化祭(福岡大会)2001.8.3～6
美術・工芸部門展 出品作品「練込みの壺」英くん(高3)

福岡県立美術館



静岡県立美術館



第24回全国高等学校総合文化祭(静岡大会)2000.8.5～9
美術・工芸部門展 出品作品「暮らしのうつわ」笹嶺くん(高2)